

# 学位論文要旨

学位論文題目 横光利一前期文学の典拠と思想

申請者氏名 YING ZHUANGYUAN

横光利一は、一八九八年に生まれ、一九四七年に没する、大正から昭和にかけて活躍した日本の文学者である。現行の昭和文学史では、その作品は新感覚派あるいは新心理主義と呼称され、日本モダニズム文学の代表的存在とみなされてきた。

しかし、横光を日本モダニズム文学の代表として位置づける昭和文学史は、一九五〇年代前後、伊藤整・平野謙などの文学者・文芸評論家によって作られたものであり、テキストに基づいた考察の結果ではなかった。そもそも、エコールとしての新感覚派の存在は、横光を含む『文芸時代』の同人たちに否定されている。また、横光は、新心理主義文学に対しても、批判的な態度をとっていた。

現行の昭和文学史の問題点は、研究対象である文学作品そのものを検討せず、作品外部の時代環境と政治的視点からその本質を見極めようとしたことにある。こうした見方は繰り返し批判されてきたにもかかわらず、いずれの批判も、昭和文学史を覆し得るほどの支持を得られていない。その原因は、それぞれの批判が、抽象的かつ断片的論述に留まっており、文芸評論家の作った昭和文学史に代わる理論をいまだ示し得てないことに求められよう。

本研究では、横光前期作品を文学史の時系列に沿って分析することを通して、横光利一の文学と思想を総合的に再評価することを目指している。横光が「新感覚派」と呼ばれる以前の小説「マルクスの審判」から、「突然変化」によって「新心理主義」に転じたとされる「機械」までの時期を本研究の対象とし、テキストに基づきつつ、横光前期文学の思想を解明する。

第一章「横光利一「無常の風」論——天地人の文学」では、横光がイタリアの犯罪学者エンリコ・フェリーの思想を受容したことを解明した。フェリーは、自由意志の存在を否定し、人間の行動は、解剖学的体質と神経を経由する外部環境の影響によると思惟し、社会と文明の変遷も自然の産物であると主張している。フェリーの思想を受容した横光は、アメリカの地理学者ウィリアム・モリス・デイビスの「地形輪廻説」をそこに付加して、自然の変遷を論証しようとした。

第二章「「マルクスの審判」の典拠と改稿」では、「マルクスの審判」が、フェリー「実証派犯罪学」の不本意犯罪の一節の翻案であることを指摘した。「マルクスの審判」には、前稿にあたる執筆年次不詳の「殺人者」という未発表原稿が存在する。「殺人者」と「マルクスの審判」のテキストを詳しく比べることで、判事の心理が加筆されていることが判明した。「マルクスの審判」の主人公である判事は、無意識のうちに、さまざまな物事にその行動が影響されつつも、それを察知できず、正しい判決を下せずに苦しんでいた。「マルクスの審判」は、判事の内面を描くことで、環境に左右される人間の意志を審理の経過とともに読者に示し、「実証派犯罪学」の思想を個人の視点から表現した作品であった。

第三章「横光利一病妻小説と輪廻思想」では、横光が、キミの病状悪化と死去以前に、すでに実体験に基づく父の死を描く小説を発表しているという、従来ほとんど顧みられてこなかった事実に注目した。親族の死を描く小説の対象こそ変わるものの、一連の作品に一貫するキーワードは「運命」である。「無常の風」の運命観から出発し、社会の発展と人類の歴史さえ、自然現象の周期性に支配される「必然」とする思想が形成される最中に、横光は、親族の死を次々と経験し、親族の死をモチーフとする横光文学を創作したのである。

第四章「横光利一「機械」と『化学本論』」では、「機械」の典拠として片山正夫による

化学教科書『化学本論』を指摘した。『化学本論』では、「宇宙間」のあらゆる現象を「機械」の如く働くエネルギーの「輪回行」の結果としている。片山は、身体外のエネルギーと身体表面の「五感」の接触に注目し、「認識の根本はエネルギー」と主張した。『化学本論』を受容した横光は、エネルギーが身体内に入った後の「頭脳」の相違に注目して、認識の相対性という独自の「メカニズム」思想に到達する。横光は、「機械」において、「私」に「化合物と元素の有機関係を験べ」させることで、化学反応の背後にある「機械のような法則」に目覚めさせる。混沌とした現実の進行につれて、再び「私」に人間の行動を予め決定する「見えざる機械」の存在に気づかせ、すべての現象を支配する「熱力学」の法則を浮かび上がらせた。一方、化学薬品によって「頭脳の組織」の侵された登場人物たちが次々と狂人となっていく様を描き、横光独自の認識論を小説化したのである。

以上の検討を通して、一九三〇年代以前の横光が、西洋科学を積極的に受容し、作品に敷衍していたことが判明した。一方、横光は、西洋思想のすべてに追従したわけではない。横光の科学受容は、自然と人間社会の統合を根幹とし、それと相容れない思想を排斥する特徴がある。自由意志を否定し、人間の認識まで相対的存在として宇宙の「輪回行」への統合を試みた横光は、東西の思想を積極的かつ選択的に吸収し、融合させ、森羅万象を解釈できる理論の形成を目指してゆく。

## 学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 168号	氏 名	英 庄 园
論文題目	横光利一前期文学の典拠と思想		

## (論文審査概要)

本論文は、前期横光利一が受容した西洋科学の典拠を涉猟し、それらがいかに横光作品に摂取されたかを分析しつつ、横光の思想的傾向性を明らかにすることで、従来の文学史的定説を克服することを旨としたものである。論文構成は以下の通りである。

序章 モダニズムの横光利一

第一章 横光利一「無常の風」論—天地人の文学—

第二章 「マルクスの審判」の典拠と改稿

第三章 横光病妻小説の思想と方法

第四章 横光利一「機械」と『化学本論』

終章 横光利一の思想と文学

第一章「横光利一「無常の風」論—天地人の文学—」は、1925年に発表された横光のエッセイ「無常の風」を対象として、横光がイタリアの社会学者エンリコ・フェリーの学説を受容したことを明らかにする。自由意志の存在を否定し、人間の行動が外部環境の影響によると思惟したフェリーは、社会と文明の変遷も自然の産物であると主張した。「無常の風」には、アメリカの地理学者ウィリアム・モリス・デイビスによる「地形輪廻説」をも取り込みつつ、自然の変遷を論理的に説明しようとする横光思想の一端がうかがわれるとする。

第二章「「マルクスの審判」の典拠と改稿」では、1923年に発表された横光の小説「マルクスの審判」を、その前稿「殺人者」と比較しつつ、前者がフェリー「実証派犯罪学」における不本意犯罪の翻案であることを論じる。「マルクスの審判」において加筆された主人公の心理描写によって、横光は、「実証派犯罪学」の思想を個人の内面に焦点化して小説化したと結論する。

第三章「横光病妻小説の思想と方法」では、親族の死を題材とする一連の横光作品に「運命」という主題が貫流することを指摘する。そのうえで、横光病妻小説を、「無常の風」の運命観から出発した横光が、社会の発展と人類の歴史を自然の周期性に支配された必然として理解する過程の作品として位置づける。

第四章「横光利一「機械」と『化学本論』」では、1930年に発表された横光の小説「機械」の典拠として、片山正夫による化学教科書『化学本論』の存在を指摘する。エネルギー不滅の法則を日本に紹介した片山の学説を受容した横光は、小説「機械」において、「見えざる機械のような法則」の支配する世界を描いた。それは、「認識の根本はエネルギー」とする片山の主張を発展させ、エネルギーを受容する頭脳の働きに着目した横光の「メカニズム」理論の小説化であったとする。

以上、四章のすべてが学会報告を経ており、第二章は学会査読誌に掲載され、第三章は学会査読誌に掲載されることが確定している。専門領域での評価をすでに獲得している点、特筆される。

以下、創造性・論理性・厳格性・発展性の各観点から評価する。

## 1. 創造性

第一章・第二章・第三章では、フェリーの著作と横光作品との関連性が論じられている。横光におけるフェリーの受容については、英庄园氏が初めて指摘した問題であり、その新規性において高く評価される。英氏の発見が今後の横光研究に寄与することは確実である。よって、創造性の点においては、きわめて優れている。

## 2. 論理性

第一章から第四章にかけて、西洋の科学的学説や思想が、横光の文学にいかに関与されているか、精緻な分析が展開されている。典拠と作品の関連性を指摘する英氏の手続きは丁寧で、論述もおおむね論理的かつ説得的である。分析の対象とした作品が限定的で、典拠の確定にやや曖昧な点が残るという課題はあるものの、論文全体として、一貫性のある方法によって結論が導かれている。よって、論理性の点においては、優れている。

## 3. 厳格性

前期横光文学を対象とした先行研究については十分に渉猟されているいっぽうで、類似する課題のもとに書かれた最新の研究成果との対峙の仕方に不十分な点がある。特に、モダニズムや新感覚派の文学運動をめぐる近年の実証研究と、序章・終章において英氏が論じる反モダニストとしての横光利一像は、大きく方向性の異なるものである。外部評価委員からは、同時代の言説や思想状況を総合的に取り込む必要性が指摘された。よって、厳格性の点においては、達成できている。

## 4. 発展性

序章・終章において、英氏は、平野謙・伊藤整によって構築された従来の昭和文学史を厳しく批判し、典拠を確認しつつ作品を分析するという方法によって、これを克服することを目指すと述べている。3.で指摘したように、英氏の横光理解には現在の日本近代文学研究の方向性とは相反する部分も含まれるが、文学史の書き換えという挑戦的な問題意識には発展性があり、それを実現しようとする意欲と実力が備わっている。よって、発展性の点においては、優れている。

以上を総合的に勘案した結果、審査委員会は、全会一致で審査結果を「合」とした。

### 論文審査結果

⊕・否

審査委員 主査 (氏名) 尾崎 千佳

(氏名) 横田 尚俊

(氏名) 森野 正弘

(氏名) 柏木 寧子

(氏名) \_\_\_\_\_